

平成30年6月1日現在

機関番号：33917

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02229

研究課題名(和文) 霊的世界と医学の交差点 古代から近世における心身観をめぐって

研究課題名(英文) The mixture point between spiritual world and medicine

研究代表者

辻本 裕成 (TSUJIMOTO, HIROSHIGE)

南山大学・人文学部・教授

研究者番号：90249920

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：二つの研究の柱を設けて研究を進めた。一つ目は医学に於ける「鬼」病の研究である。日中の医学では「鬼」などの霊的なものを病因と考え、それに医学的対処が可能であるとするところがあった。また医学が呪術を取り入れることもあった。「鬼」病に医学的対処が可能であったのは、「鬼」の物質化ともいべき発想が背景にあったことが挙げられる。

また、『医談抄』について、上古からの権威的医療である脈診や鍼の有効性を、衰退史観を言い立てることによって否定していること、説話として治療事例を引用することによって医療のあり方を説くという性格があることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：I am developing this research based on two pillars: The first is a study of the concept of “鬼” illness in medicine. In the past, people in China and Japan believed that a spirit such as “鬼” was the cause of various illnesses. Therefore, “鬼” could be an object of medical treatment. But sometimes, magic was also used. The basis for the treatment of “鬼” illness by medicine was a kind of thinking that conceived “鬼” as being something material. The second pillar is a study of “Idansho.” This text negates the validity of pulse checking and acupuncture, which since antiquity have been authoritative methods of medical treatment. Idansho’s attitude is based on the idea of decline in the course of history. I show that the text, by using examples of medical treatment as tales, reveals the book’s character as an explanation of the nature of medical treatment.

研究分野：国文学

キーワード：医学 霊的世界 鬼 病気 『医談抄』

1. 研究開始当初の背景

心身の不調について、古代より日本人はさまざまな対処を行ってきた。それを現代的な視点から分けるならば、医学的対処と宗教・呪術的対処ということになる。

そのそれぞれについては、厚い研究史の蓄積がある。中国医学と、それを受け入れた日本医学については、医学史研究者による質量共に豊かな成果が蓄積されており、医家たちが中国医学から得た知識を元に、薬・鍼・灸などの医学的対処によって、どのような処方でも心身の不調に臨んだかを知ることができる。

また、宗教・呪術的対処についても、平安期の文献に多出する「もののけ」(一種の憑霊)をめぐる国文学研究・歴史学研究や、修法・加持などの宗教的対処についての、文学と宗教の交錯点的領域における研究、病氣治しの呪術に対する民俗学的研究など、さまざまな分野からの研究が行われている。

しかしながら、心身の不調に対して医学的対処、宗教・呪術的対処を分けて考えるのは現代的感觉にすぎず、かつての日本人は医学的対処と、宗教・呪術的対処を二分しては考えていなかったと思われるし、また、心身の不調の原因については、その両者の要因は、入り混じって考えられ、時として重なっていた。

そのような中で、二つの病因観の交錯領域は、学問分野間のいわばニッチ(隙間)領域となり、まだ十分な考察が行われていないように思われる。

たとえば、中国の古代的な医書、およびそれを引用した『医心方』など日本の医書には、霊的な病に対して、現代的な眼から見ると呪術的と言えるような対処法が少なからず記載されている。そのような対処法は、平安時代貴族社会では、医師に対して求められることはほとんどなかったことが指摘されている(上野勝之氏『夢とモノノケの精神史』)が、医家の側でそのような対処法が用意されていたことには注目してよいと思われる。また、病因を霊的なものと認定しながらも、それに薬や鍼灸などの医学的対処が有効であるとしている記述も少なくない。このような医学のあり方は、人間の心身をどのように捉えてのことであったのだろうか。本研究では、それを明らかにしたいと考えている。

逆に、仏教者の側でも、心身の不調に対して医学的対処を指示する場合もあった。たとえば霊的な原因を想定された『伝尸病』に対して仏教的な文脈の中で灸による治療が指示されている資料が存することなどは過去に論じた通りである(美濃部・辻本ほか「伝尸「鬼」と「虫」-杏雨書屋蔵『伝尸病肝心鈔』略解-)。

代表者、および研究協力者の長谷川雅雄、ペトロ・クネヒトは、故美濃部重克を中心として、国文学、精神医学、文化人類学の三分野の研究者からなる学際的な研究グループ

を組織し、「医事的教養と宮廷医の活動 中世医事書、特に医事説話をめぐって」(2006~2008年度、代表 美濃部重克)、「中世に於ける医事的知識の啓蒙と実践 - 医事啓蒙書・呪術書を中心に -」(2009~2011年度、代表 美濃部重克 美濃部死後は長谷川が交代)の二度わたって、科研費による研究を行い、成果を挙げてきた(今回の代表者である辻本は、両研究に研究分担者として参加した)。後者の研究成果は単行書『「腹の虫」の研究』(長谷川・辻本・クネヒト・美濃部著、名古屋大学出版会、2012年)に結実し、病因としての「虫」に対する学際的な考察を行うことができた。「虫」という病因は、まさに医学的な要素と霊因的な要素が入り交じり重なった、今回の研究に連なるものであり、日本人の精神世界、心身観の一端を明らかにすることができたと思われる。しかしながら、「虫」の霊的な部分に医家がどのように対処したか、「虫」の霊的でない部分に宗教・呪術がどのように対処したかについては考察が深め切れていないし、また研究テーマを「虫」に限ったために抜け落ちた部分が多々あることは否めない。今回の研究は、過去の研究を引き継いだ上で、その部分を補って発展させることを志すものである。

2. 研究の目的

心身の不調について、日本人は、古代から医学的対処と宗教・呪術的対処の両方を行ってきた。心身の不調は、霊的なものとされる場合と、そうでない場合とがあったが、霊的な原因の場合は宗教・呪術的対処が、そうではない場合は医学的対処がなされるといった単純な住み分けではなく、二つの病因観、二つの対処のあり方は混沌と混じり合っていた。

単純に住み分けがなされ、霊的な原因に宗教的・呪術的対処がなされる時代から、霊的な病因観を排除し、医学的対処のみがなされる時代に一直線に時代が変化していくのであればことは簡単である。しかし、必ずしもそのようなことではなく、霊的な病因を言いながら医学的対処を可能とすることが珍しくなかったのである。

そのような思考が何故可能だったのかを考えることによって、かつての人々が、人間の身体をどのように捉えていたのか、どのような世界観を持っていたのかを明らかにしたい。

本研究では、従来学問のニッチ(隙間)領域に埋もれていた、霊的世界と医学の交錯点について、どのような言説がなされたのかを発掘・分析し、日本の心身観をめぐって、時代的な変遷にも目を向けつつ明らかにしたいと考えている。

あわせて、霊的世界と医学の交錯点で成立した資料を発掘・紹介し、当該研究に関わる諸分野の研究の発展に寄与することを志す。

3. 研究の方法

当研究は二つの柱からなる。

ひとつは、医学研究者、人類学者との、中国・日本の医書の読解・分析である。本研究は学際的研究となるので、他分野の研究者との連携が必要となる。協力を求めるメンバーは「研究開始当初の背景」に記した医学研究者の長谷川雅雄氏、文化人類学者のペトロ・クネヒト氏である。両氏は既に大学を退職しており、科研でいうところの研究協力者とはならないが、現在も精力的に研究を続けており、実質的には両氏との共同研究を行い、研究への参加を依頼する。

代表者と両氏との3名によって定期的に研究会を開催し、日中の医書ほかの収集した資料の読解と分析を行う。これによって、医学が、霊的な存在（中国では「鬼」など）が、どう病気と関わり、どのような治療法を、どのような理論によって想定していたのかを考察する。

さらに、クネヒト氏の協力を得て、霊的なものが原因と考えられていた病を除ける民俗行事 たとえば庚申信仰や虫封じ などについての調査を行う。

また、もう一つの柱は、いまだ研究が十分に進んでおらず、当研究との接点を持つ『医談抄』の注釈的研究である（同書では、たとえば「伝尸病」についての一段を設けている）。同書を分析することによって、鎌倉時代の日本の医学観・身体観を抽出し、当時の日本人、特に医学に携わる者たちが、霊的な存在と病気・身体の関係性をどのように考えていたかを考察する。また、その前提となる日本中世に於ける日本人の思考様式についても分析を加える。

4. 研究成果

霊的世界と医学の交錯点という本研究課題について、かつては「鬼」を病因とする病が日中において広く考えられており、それに対して、宗教的・呪術的治療がなされるだけでなく、薬や鍼灸のような医学的治療がなされ、しかもそれらの治療がれっきとした医学書の中で医師によって主張されていた、という点に、かつての身体観を分析する重要な手がかりが隠れていると考えるに至った。

如上の観点から日中の「鬼」病にかかわる言説を収集・整理し、共同研究者と共に論文を執筆した。

古い医書では、「鬼」を病因とする「鬼病」の記載が多く見られ、かつての医学が病因としての「鬼」をいかに重視していたかが知られる。本研究では、「鬼」病とはいかなるものであり、どのような医学的意義をもっていたかについて検討した。「鬼」病の治療は、薬物や鍼灸その他の医学的治療法と共に、呪術的治療も併せて行なわれていた点が特徴である。中国古代に「鬼」がどのようなものと捉えられていたかを概観するとともに、医書に於ける「鬼病」の記載を分類、検討し、

「鬼病」が「鬼毒」すなわち「鬼」の持つ「毒」によるという考えが見いだせること、「鬼病」が伝染性をもつということ、医学で「鬼」が取り上げられる場合に、「鬼」を殺すことができるという、特異とも言える「鬼」観が取り入れられていることなどを指摘し、それらの意味するところを考察した。

そのような「鬼病」観の背景となったのは、ひとことでいえば、いわば「鬼」の物質化とでもいうべき、本来霊物であり、肉体を持たないはずの「鬼」を物質的なものと見なし、それによって医学的手段によって「鬼」を退治する、鬼病を治すということが可能だとする思考のメカニズムであると考えられる。

ただし、医学と医学以外の「鬼」病観の乖離と重なりについてはいまだ十分な考察で及ぶことができておらず、今後の課題といえよう。たとえば『太平広記』では「鬼」をテーマとする章段が存在し極めて多くの「鬼」についての説話が収載されているが、医学や医師について触れられることは極めて少ない。しかし同時に医学と共通する「鬼」退治のメカニズムも見取れるのである。その点で医学の「鬼」観は、医学以外の「鬼」観と重なりを持つが、一般の人々の意識の中で、「鬼」病の治療に医学や医師が実際にどこまで頼りにされていたのかについては疑問も残る。しかし、仮にそうであるとして、にもかかわらず医書が鬼病について多く触れ、呪術的治療法も含めて治療法を多く載せていることによりどのように説明を付けるかなどの課題が残っている。

また、日本に於いても『医心方』は中国医書に載る多くの呪術的治療法や、霊的な原因の病の治療法について載せるが、それらは日本の医師達にはそれほど継承されなかったように思われる。それをどのように意味づけするかも今後の課題である。

また、医学では、疫を病因とする考え方など、霊的な病因を否定する言説も徐々に広く行われていくようになっていく。この点についても今後分析・検討の必要があるだろう。

もうひとつの研究の柱は、日本の鎌倉時代の成立と思われる惟宗具俊編『医談抄』の研究であり、注釈的研究を進めるとともに、いくつかの考察を行った。

まず、『医談抄』が、成立当時の医学的な環境をどのように捉え、どのような提言を行っているのかの研究を行った。『医談抄』は衰退史観で医にかかわる環境を捉えており、時代が悪くなった今ではもはや、よき時代であった上古と同様の医術を行うことはできないことを説いている。特に古来医学の重要な柱とされて権威的に称揚されてきた「鍼」と「脈診」を、衰退史観を盾にして否定していることが注目される。「鍼」や「脈診」は尊い医術であるが、それゆえにこそ衰退した当代では使えないのだという論理を使って、その当代に於ける有効性を否定している。上古を尊びつつも、上古の医術を敬して遠ざけ、

実質的には上古の医術を否定していることは中世日本の思考法のひとつのサンプルとして極めて注目されるように思われる。

前時代よりは病への霊的な見方が後退したように見える鎌倉時代に於いて、このような時代観があったことは、本研究のテーマである霊物が原因とされた病への向かい方と、何らかの関わりを持っていると考えられるであろう。

また、説話によって医学を説くという同書のコングレートの意味を考えた研究発表を2017年4月に開催された説話文学学会のシンポジウムで行った。その『万安方』にかかわる部分は論文として発表した。『医談抄』による、『医説』など先行医書の治療事例の引用は、同じ資料、同じ書物を引くほかの医書とは大きくちがっている。ほかの医書では単なる治療法(薬物の選択など)の実例として引いているに過ぎず、それとは大きく違っているのである。

説話の本質について小峯和明氏は「例証やたとえとしての「ためし」としての面と「おこり」としての面を指摘された上で、「物語として独立して語られながら、何らかの言説の意味を与えられ、機能する」(「説話の場と語り」(『説話とは何か』(説話の講座 第一巻(勉誠社 一九九一年)と述べる。『医談抄』は、後者の「おこり」についてはあまり興味を示さないが、『医談抄』の治療事例は、まさに小峯氏の言にある「例証やたとえとしての「ためし」にあてはまるのではないかと考えられる。

『医談抄』の治療事例の引き方は、個別的、一回的にすぎないものではなく、決して同じ状況ではないが、類似・相似のほかのシチュエーションに置かれた場合にも応用可能な、汎用的な医に関わる考え方、行動原理を人(おそらくは後進の医家)に教えている。そのような意味で、『医談抄』は「治療事例の記録・集積」を「説話」たらしめていると言える。

このような説話を医学に利用するというあり方は、霊的なものに医学で対処しようという考え方と繋がるものと思われ、今後検討を重ねていきたい。

この成果については学会発表ののち、論文として学会誌に提出し、現在活字化が進んでいる。「医事説話の嚆矢 惟宗具俊『医談抄』をめぐって」(辻本裕成)として、2018年7月刊行の『説話文学研究』第53号に掲載される予定である。

この他、論文化に及んでいない研究としては、「蠱(こ)」と呼ばれる虫を使って行われるまじないによって起こる病症が挙げられる。そのまじないの方法や、対処の方法などについての言説を、学際的な観点から分析・検討を行った。「蠱」はもともとは虫を使った呪術であったと思われるが、時代が下るとその方法はさまざまなものとなり、中国では民国初期まで信じられていたようである。こ

れについては日中の資料を検討したが、いまだ研究をまとめる段階には至っていない。

また、近代的な視点からは、純粋な医薬というより、呪薬という側面が強いと捉えられる「竜骨」についての研究も行った。その素材や薬効がどのようなものと考えられてきたか、その議論の歴史を日中の医書を中心に検討し、霊的な力を見出しやすい薬が、どのような病にどのような思考を背景に用いられたのかを考えた。これについても、資料を集積し、若干の検討を行ったが、発表に足る成果としてまとめるには及ばなかった。

以上2つの問題については、今後研究グループでの議論を重ね、順次論文その他として発表していきたいと考えている。

この他、人類学者クネヒト氏の協力を得て、京都の八坂庚申堂の行事についての調査を行った。

また、貴重な医書を多く所蔵する京都大学附属図書館富士川文庫、武田科学振興財団杏雨書屋を訪れ、資料の調査を行った。これらの資料の分析はまだまだ充分ではなく、今後研究を進めていきたい。

さらには、当研究を進めているうちに付随・発展する研究として、『医談抄』の記述の中に、『医心方』の成立についての新発見と思われることがあり、いずれ学会誌などに投稿したい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

長谷川雅雄、辻本裕成、KNECHT, Peter、「鬼」のもたらす病—中国および日本の古医学における病因観とその意義—、アカデミア 人文・自然科学編-、査読無、16号、2018、頁数未定(現在印刷中)

辻本裕成、『万安方』に於ける『医説』引用、南山大学日本文化学科論集、査読無、17号、2017、15-31

辻本裕成、末代の医療かくあるべし—『医談抄』の衰退史観をめぐって—、南山大学日本文化学科論集、査読無、16号、2016、1-16

[学会発表](計2件)

辻本裕成、医事説話の嚆矢、2017年度説話文学学会 四月例会(2017年4月22日 於成蹊大学)

辻本裕成、『医談抄』研究の現時点—伝承文学注釈叢書解題稿—、伝承文学研究会 名古屋例会(2016年5月22日 於中京大学)

6. 研究組織

(1)研究代表者
辻本 裕成 (TSUJIMOTO, Hiroshige)
南山大学・人文学部・教授
研究者番号：90249920